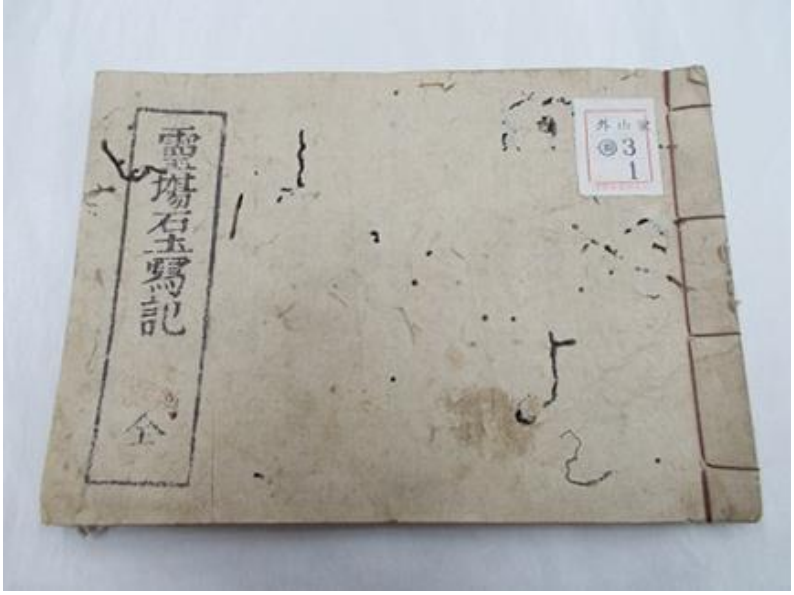
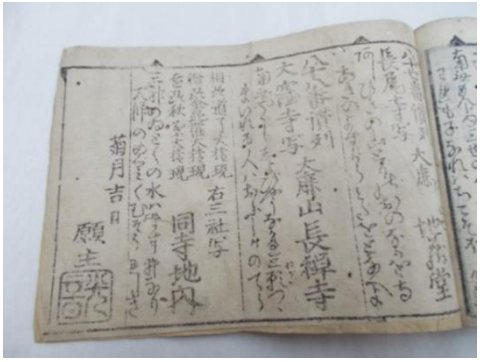
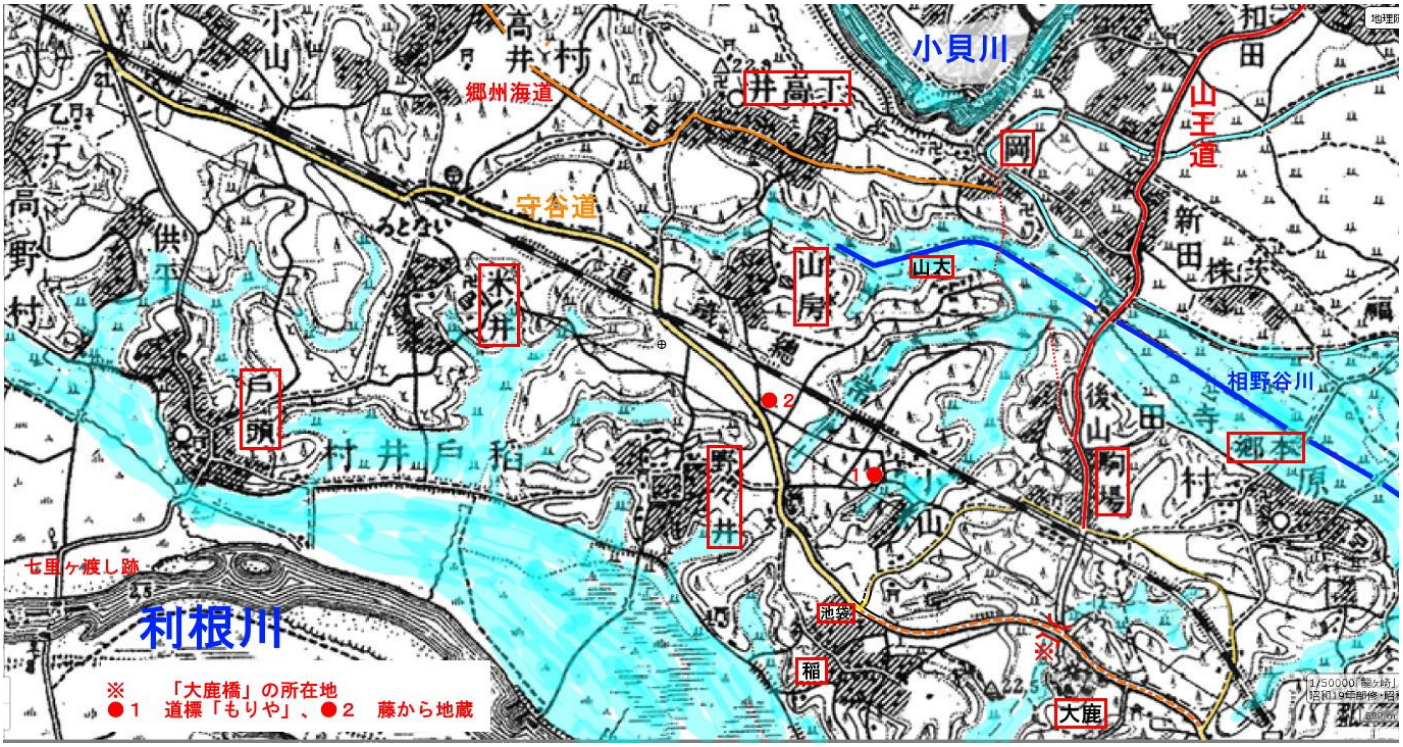
新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り

願主観覚光音禅師の版本、
安永四年(1775)九月版
「霊場石土写記　全」
茨城県立歴史館所蔵。





取手市の谷津(水色)と高地(白)



取手の寝釈迦像、
駒場集会場から
本郷の東漸寺へ
移っています。

http://88souma.net/

２０２４年２月コース地図

赤：遍路コース、青：守谷道 旧道名 佐倉道

新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り

2024年2月25日

新四国相馬霊場八十八ヶ所とは、

新四国とは、本国の四国霊場から移した他国の八十八所に対して呼ばれます。准四国という大師霊場もあり、新四国と同様な意味をもちます。

新または准四国大師霊場は明治時代以降に建立されたところが大変多く、全国に於いては数百ヶ所あったと云われています。

しかし、四国巡りが流行した江戸元禄時代の頃に誕生した、新四国や准四国の大師霊場は数が少なく、又、八十八すべての札所が残っている霊場も少なくなった現状をみると、御堂と像が残る相馬霊場は貴重であり、歴史的意義があると言えます。

取手の春はお遍路さんの鈴の音とともにやって来る、

と詠われているように、毎月廿一日は「お大師様弘法大師の日」で、梅の花咲く二月廿一日からお遍路さんの旅は始められたようです。

相馬霊場が出来て、おおよそ二百五十年になりますが、出来た頃のこの地は下総国相馬郡と呼ばれていました。取手宿と云われ利根川水運の要所で賑わっていたようです。下総国という事は、現千葉県に属していました。

打始

第七十番、本郷の東漸寺境内、

寺田にあった永福寺(廃寺)から移された札所です。

ご本尊、観音堂内の馬頭観音。

移し寺、香川県七宝山本山寺

御詠歌、本山に誰が植えける花なれや
春こそ手折れ手向けにぞなる

馬頭観世音菩薩(寺田観音)は行基の作と伝えられます、元和三年(1617)安置。

寺田にあった天正年間開創の永福寺が水害の難から逃れ現在の駒場に移りました、永福寺は寺田観音とも言われ馬頭観世音菩薩を祀っておりました。

しかし永福寺は廃寺となり、観音堂と大師堂はいつ頃なのか東漸寺へ移されました。

境内の神馬堂には二体の木馬が供えられ昔の祭り事が偲ばれます。現在は行われておりません。

毎年七月十七日に馬施餓鬼の行事があり、五色の幡に飾られた馬に乗り、参道から仁王門を潜り観音堂まで走り抜ける、という祭りのようでした。

藁葺屋根に単層八脚門の仁王門と観音堂の間には「目隠し銀杏」の大樹があり、馬捌きを間違えると落馬のおそれがあり、やや危険な祭事「馬施餓鬼」が行われていたそうです。

馬の霊を供養する施餓鬼は福島県相馬市の「相馬野馬追」に受け継がれ、相馬氏発祥の地である、千葉県鎌ケ谷や小金牧(柏市と鎌ケ谷市)を含み下総相馬では行われていませんが、奥州相馬の相馬野馬追い祭りは下総相馬家と奥州相馬家の因縁(いんねん)と野生馬の調教地であった故郷への郷愁を感じます。

第七十一番、本郷の興隆山寿量院東漸寺(とうぜんじ)。

東漸寺は、天正二年(1574)創建。

平成16年改築されました。

ご本尊、阿弥陀如来。

移し寺、香川県剣五山弥谷寺(けんごさんいやだにじ)

御詠歌、悪人とゆきづれなんも弥谷寺
ただかりそめも良き友ぞ良き

仁王門は元禄三年(1690)に寄進されたもので、単層八脚門の藁葺屋根となっており、取手市内唯一の仁王門です。県指定文化財。

目隠し銀杏は樹齢六百年の大銀杏です。

永福寺廃寺の際、観音堂と大師堂はいつ頃に移されたのか、又寺の統合なのか諸々の経緯は不明です。

只、文化四年版の「霊場石土　光音著」では、巡拝順路が、第69番から、第70番永福寺、第71番東漸寺と分けて記されており、霊場開基の頃は、永福寺も存在していたのではないでしょうか。

永福寺跡地には墓地が残留しており、現東漸寺より数百メートルのところに所在を確認できます。

「寺原」について。常総線寺原駅は同線開業当時からある駅ですが現在地名はありません。地名の寺田と桑原を一つにし「寺原」として、明治末期に学校や役所を現在の本郷に置きましたが、数年で「寺原」地名は使われなくなりました。

【幻となりつつある伝説】

東漸寺の東漸の意味に、「東を漸す寺」、東国の天皇と呼ばれた平将門を敬うような寺名に、取手市本郷には将門に関わる伝説があります。

以下文は伝説としてご理解下さい。

将門の母が住み本郷で産んだ、そして幼少の頃の将門は母と暮らしていたが、平家にとって将門の誕生は邪魔な存在であったようで、幼少期は落人のような生活を過ごしていた様です。

将門が幼少の頃の伝説は、野々井の竜禅寺や惣代八幡神社、大山の将門の母の井戸などにあり、将門の死直前の桔梗塚や岡堰の朝日御殿や桔梗沼、大日塚の将門神社の祠と九曜紋を受け継ぐ家などが数々残っています。このように伝説に惑わされてしまいそうな本郷の将門生誕の地のようですが、現在のところ伝説で結論されています。

釈迦涅槃像(しゃかねはんぞう)、

江戸時代の作、寝姿像の身長は90Cm程です。

涅槃像とは、釈迦が入滅する様子を仏像としてあらわしたもの。寝仏、寝釈迦像、涅槃像とも呼ばれます、足の裏には宇宙観を示す文様などが描かれている。なお、釈迦入滅の様子を絵画的に描いたものを涅槃図、仏涅槃図と呼びます。

茨城県の寝釈迦像は、取手の法海寺観音堂の他に、下妻市金林寺(時宗)、旧新利根町阿弥陀寺(時宗)、旧波崎町神善寺(真言宗)、旧岩瀬町小山寺(天台宗)の富谷(とみや)観音にあります。特に小山寺は国宝の三重塔もあり本堂の千手観音も指定文化財で拝観することができ癒されます。更に栃木県真岡市の高田山専修寺には、元禄15年(1702)江戸湯久兵衛作の木造金箔塗り、日本最大の寝釈迦木像があります。

第三十番、JA取手総合医療センター近隣の一乗院(廃寺)跡地の墓地。井野普門院の末寺でした。

ご本尊、不動明王。

移し寺、高知県百々山善楽寺(どどざんぜんらくじ)

御詠歌、人多くたち集まれる一の宮

昔も今も栄えぬるかな

御詠歌にそぐわない、相馬霊場が残る一乗院跡地の墓地で衰退してしまった寺院です。

一乗院という名は、かつて奈良の興福寺に存在した塔頭の一つでした、しかし廃佛毀釈「仏教寺院・仏像・経巻を破毀(はき=破棄)し、僧尼など出家者が受けていた特権を廃するなど、仏教に対する攻撃を指す。文献によっては「廃仏稀釈」と表記されることもあるが誤り」により破壊され廃絶した。

摂家(※)の近衛家系の勢力が強かった為に衰退一途となったようです。室町幕府最後の将軍足利義昭が還俗前に居た事でも知られています。

栃木県足利市や高野山に一乗院があり著名なお寺ですが、寺名は全国に散在しています。

(※)摂家(せっけ)とは、鎌倉時代に成立した藤原氏嫡流で公家の家格の頂点に立った五摂家をいいます。

大納言・右大臣・左大臣を経て摂政・関白に昇任できた。近衛家・九条家・一条家・二条家・鷹司家(たかつかさ)を摂関家、五摂家、執柄家(しっぺいけ)ともいい、五摂家の中から藤氏(とうし)の長者が選出されました。

天皇家子孫存続の為に藤原家から姫を嫁がせ跡継を産み、地位を確保維持していたと云えます。

また、菅原道真を大宰府へ左遷した長者です。

第十二番、井野台の虚空蔵堂(こくぞう どう)。

ご本尊、虚空蔵菩薩(十三参りの菩薩さま)

移し寺、徳島県摩廬山焼山寺(まろざんしょうさんじ)

御詠歌、のちの世を思えばくぎゃう焼山寺

死出や三途の難所ありとも

虚空蔵堂をのぞくと宮殿様の厨子が納められている、暗くてよく見えないが、その扉にうなぎが彫ってあり、そのためこの集落の人はうなぎを食さないとのことであるが、この堂の後ろの低地には昔は田圃が広がりよくウナギが採れたといいます。

虚空蔵菩薩は智恵と慈悲の菩薩で、男女十三歳になると智恵の増進と厄落とし祈願で虚空蔵堂をおとずれていたそうです。

また虚空蔵菩薩求聞持法(ぐもんじほう)は、空海が修行で用いた記憶方法であり、後世、江戸時代の盲目の国学者である塙保己一(ほきいち)【「群書類従」という日本国歴史書を編纂した】が生涯活用した記憶方法として、現在でも教育現場で用いられています。

三重苦で有名なヘレン・ケラーの日本訪問に際しては、盲目の国学者は、彼女の生きる糧となり重要な存在であった為に、日本を知りたいという目的もあり、昭和12年の初来日に於いて、渋谷の国学院近隣の「温故学会」を真っ先に訪れています。

第二十三番、井野台の薬師堂。

ご本尊、薬師如来

日光菩薩、月光菩薩、守護神十二神将像の一式有

移し寺、徳島県医王山薬王寺。

御詠歌、皆人の病みぬる年の薬王寺

るりの薬をあたえます

薬師堂の創建は、薬師並びに十二神将像と共に、遠州の医王山薬師院油山寺(ゆさんじ、天平年間(729)行基の開基、孝謙天皇の勅願寺、天皇家の菊の宗紋

です)より昌松寺に移されました。
昌松寺は白山の諏訪宮から、この井野台に檀家と共に移りました、しかし現在は常磐線沿いの井野へ移っております。
白山諏訪宮が昌松寺開山の地であり相馬霊場第八十三番札所が開基されましたが、後に、ここ井野台の薬師堂の地へ移り第二十三番札所と二つの札所を管轄することになりました。しかし、昌松寺の末代が第八十三番札所を元の白山諏訪宮へ勝手に戻し、しかも戻した札所が後世まで人気が続いたのです。
更にもう一つ、昌松寺が現存する地に、既に人気薄となった第八十三番札所は移したが、薬師堂はここに置き去りにしていったのはどうしてなのか。
医王院という院号を受継ぎながら何故なのか、疑問はいまだ不明だそうですが、御住職は気付き縁起の一部として、お話し下さいました。
当薬師堂由来記によれば、眼病に御利益があります。「め」と、めを裏がえした「め」の字の絵馬があり、眼病治療の懇願絵馬だそうです。
薬師堂の南側の道を大同道といいました、大同年間(806～)に造られた道で、十二神将がこの道によって移られたためだといわれています。

奈良薬師寺東塔と「凍れる音楽」

相馬霊場エリア内には薬師堂が、あちらこちらに散在しているが、本尊薬師如来と両脇侍の日光と月光(がっこう)そして十二神将でオールスタッフが祀られたお堂は少なく希少です。
明治政府政策の最大の汚点、廃佛毀釈(はいぶっきしゃく)によって、英国のアーネスト・フェノロサは、明治政府が制定した廃佛毀釈令により仏教美術品の多くが廃棄されようとしていた頃、米国から派遣されました。フェロノサは弟子の岡倉天心と共に日本全国を歩き、日本文化の研究に従事していたが。
同時に、塵の様に扱われていた、日本の仏像や絵画の美術品をボストン東洋美術館に送り込んでいた。しかし、天心はアメリカに渡る美術品を横目に見て安堵していた。なぜか？日本で放棄しようとしている美術品を守るには、ボストン美術館は申し分のない最適な処でした。
そして、フェノロサは天心に誘われ奈良薬師寺を訪れます。彼は薬師寺の三重の東塔を見て「凍れる音楽」と賛美したといいます、天心という説もあります。ヨーロッパでは既に、ゴシック様式建築でドイツのシャルトル大聖堂は中世スコラ学(中世ヨーロッパで教会及び修道院付属の学校や大学を中心として形成された神学・哲学の総称)の結晶とみなされ、ドイツ哲学者のシェリングが「凍れる音楽」といったと云われています。フェノロサは引用したのか？
このシャルトル大聖堂は、後のノートルダム寺院に影響を与えた寺院だそうです。

【凍れる音楽の意味】

凍れる：不動である建築物。
音楽：旋律と共に流れるものだから真逆の性質であり、この言葉同士をくっつけることで建築の本質を表現しようとしました。

第四十六番、井野台花輪城跡地の阿弥陀堂、
或いは弥陀堂、どちらでもよい。

ご本尊、阿弥陀如来。
移し寺、愛媛県医王山浄瑠璃寺(じょうるりじ)。
御詠歌、極楽の浄瑠璃世界たくらえば
受くる苦楽はむくいならまし

取手に居城した、大鹿左衛門織部時平は、文暦(1235)年代に花輪城をここに建てましたが、晩年に息子の平内左衛門に花輪城を譲り、大鹿に砦を造り大鹿城に居城しました。しかし、永禄四年(1561)、大鹿太郎左衛門は、小文間城主の一色宮内の不意打ちを受け城は崩壊してしまいました。
砦から鳥出、取出、取手の地名の起源がここにもあります。

第八番、井野台の城山観音。

ご本尊、十一面観音菩薩。
移し寺、徳島県普明山熊谷寺(ふみょうざんくまだにじ)
御詠歌、薪とり水くま谷の寺に来て
難行するも後の世のため

お大師様を見ると、大師は乳飲み子を抱いています、子育て大師と云える姿で珍しい。
花蔵院(現在の井野の普門院とも言われていた)の跡地で城山観音と呼ばれています。
「一筆啓上 火の用心 お仙(嫡男、仙千代君)泣かす な 馬肥やせ」という短文の書簡で有名な、鬼作左とも言われた、本多作左衛門重次の居があったそうです。享禄二年(1529) 七月十六日～文禄五年(1596)八月九日の晩年から居住し68歳で亡くなりました。

お墓が常磐線を越えた桜ヶ丘にあり、甲冑などの遺品は、青柳(あおやなぎ)本願寺に祀られています。
取手青柳の本願寺は、後に藤代の高須大師霊場の開基に寄進貢献していました。

第三十二番、井野台の観音堂。
ご本尊、十一面観世音菩薩
移し寺、高知県八葉山禅師峰寺(ぜんじぶじ)
御詠歌、静かなる我がみなもとの禅師峰寺
浮かぶ心は法の早船

台座正面の刻名で、文化四年(1807)に山王村、椚木村の講中が寄進したことがわかります。
堂の後ろには、数々の尼さんの墓標がある、現在この堂は隣家の奥様が管理されています。

第六十一番、井野桜ヶ丘の大日堂、万蔵院跡地
ご本尊、大日如来。
移し寺、愛媛県梅檀山香園寺(せんだんさんこうおんじ)
御詠歌、のちの世を思えばまいれ香園寺
とめてとまらぬ白滝の水

大龍権現といわれ井野、桑原、台宿、青柳、吉田地区の総鎮守でした。
すり粉木が奉納されています。すり粉木で痛い箇所を叩くと痛みが無くなると言われ、完治した時には、新たにすり粉木を奉納してお礼参りをする風習が全国的にありました。
札所前の道を更に東方へ五百メートル先に、本多作左衛門重次の廟所があり墓碑があります。
四国第六十一番の宿坊は子宝温泉大浴場で有名。
又子安大師四誓スローガンで世界中に知られる。

本多作左衛門重次の墳墓、別名御墓山、県指定史跡。
本多作左衛門重次は「一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ」の手紙で知られる徳川家康の家臣でした。鬼作左と呼ぶ。(御墓山＝おはかやま)
享禄二年(1529)三河に生まれ、松平清康、広忠、家康に仕え、晩年を下総国相馬郡井野で過ごし文禄五年(1596)、六十八歳で病死しました。
「寛政重修諸家譜」慶長元年(1596)七月十六日井野に於いて死す。法名高分。その地「青柳本願寺に埋葬」は、間違えで「井野御墓山に埋葬」である。
玉垣に囲まれた三つの墓塔が史跡となっている。
中央の大型の五輪塔が重次の墓で正面には梵字が刻まれている、特に銘はみられません。
右側のやや小型の五輪塔は「坂休院、寛永四丁卯九月十二日、体誉一源浄本居士」の銘があり、重次の客人であった岡野彦五郎という人物の墓である。
左にある尖頭型の墓塔には「本多九蔵藤原重玄(しげはる)之墓」という銘があるので、永禄元年(1558)に戦死した重次の弟の重玄の墓であります。
尚、福井県坂井市丸岡町の本光院にも墓がある。
現在、鬼作左の遺品が青柳本願寺に残る。
鬼作左の死後に本多家の菩提寺となりました。
千葉県久寺家の本願寺山の裾野には本願寺沼があり、渡り鳥の羽休み沼として沢山の水鳥が訪れていました。此処に須賀本願寺がありましたが、江戸初期に利根川を舟で取手に渡ったとありました。
柏市富勢図書館の富勢村史より。

青柳本願寺の草創に時代と地理的条件が一致するこの話は、取手の本願寺の歴史を変えるものです。

第三十一番、井野桜ヶ丘の天満宮。
祭神は菅原道真、ご本尊、十一面観世音菩薩。
移し寺、高知県五台山竹林寺
御詠歌、南無文珠三世の仏の母ときく
我も子なれば乳こそほしけれ

天満宮の祭神は菅原道真公で、室町末期の天正元年(1573)二月二十五日、道真公が昇殿された日に京都北野天満宮より分霊してお祀りしたとあります。
災難除け、風邪除けと二種類のお札があり、僧侶像が祀られた小堂が並んでいます。
堂の中に御詠歌が掲げられていて「このかどを除けてとうれよ風邪の神 大師すがたのあらん限りは」とあり、お札として以前は持ち帰ることが出来ました。弁財天、稲荷大明神、石尊大権現、八幡宮等の石碑が集め置かれている、庭の梅が咲頃は井野を見渡す景色も良い所です。
【幻の第三十一番札所と昔の記憶を証明する市史】
井野天満宮には「かぜの神様」と大師堂第三十一番が並んでいます。天満宮本殿は、菅原道真を祀ってあり、学問の神らしく広い境内の半分は梅林の古木で占められ初春の観梅時期は、進学祈願で賑います。実は、ここの大師堂については、40年前の取手駅前の情景が蘇り、黒っぽいお堂を思い出します。
昭和40年代の頃、取手の東口駅前は、紡績工場の跡地に片倉ショピングプラザビルが建ち、イトーヨーカ堂が営業を始めた頃でした。この頃の記憶に、

ヨーカ堂と取手駅の間、現在ラーメン屋の交差点の角に、二つの小さなお堂が建っていました。この頃は、このお堂がなんなのか知るよしもなく関心もありませんでしたが、記憶はおぼろげに残っていました。そして今になって「取手市史、民俗編Ⅱ」第五章「信仰」第四節「大師参りと光音講」の「井野のお大師様」に、イトーヨーカ堂前の大師霊場札所を証言してくれている文面に出会いました。

三十一番はヨーカ堂前にあり、天満宮の札所は掛所だったという。ところがある日、村の老人達はヨーカ堂前の札所堂を取り壊してしまい、札板の三十一番を天満宮へ持って行ってしまった、もっとも天満宮の境内の方が相応しい場所でかえって善かったかも知れない。という記述でした。

また「天神様は三十一番の風の神様でしょ」「この三十一番が風の神様で『この門を よけて通れよ 風の神 大師姿のあらん限りは』ってこういうお札を軒先に貼っておくといいというんです」、この当時、柴沼旅館の中に貼ってあったようです。

四国第三十一番は、高知市の竹林寺で本堂裏の夢窓国師による蓬莱山庭園は見るべし、志度金三百円が必要だが、宝物館の秘仏拝観が含まれています。

南国土佐をあとにして、の歌で有名なお寺です。

第二十番、井野の地蔵堂。

ご本尊、地蔵菩薩。移し寺、徳島県霊鷲山鶴林寺、（りょうじゅさんかくりんじ）

御詠歌、しげりつる鶴の林をしるべにて
大師ぞいます地蔵帝釈

相馬霊場保存会指導者高橋栄勝師記念碑が大師堂の向い側に建っています。大師堂の改築と霊場発展の為に終生努力された相馬霊場の偉人で、地蔵堂境内に居住されていました。昭和12年11月享年68。御堂前の通りは古く現在も通勤する人々が取手駅への通勤路として使われています。

四国の20番鶴林寺(かくりんじ)は、相馬の20番とまるで違う、一里強の山道で「胸つき八丁」「お遍路ころがし」と云われる所です。しかし本堂の前で二羽の白鶴に迎えられると疲れも癒されます。

宿坊に一泊すると説法を聞くことができます。

第四番、台宿の不動院。

ご本尊、大聖不動明王。

移し寺、徳島県黒巌山(こくがんざん)大日寺

御詠歌、眺むれば月白砂の夜半なれや
ただ黒谷に墨染めの袖

江戸田山不動院は東福院の境内にあったもの、東福院は、土浦の法泉寺の末寺(廃寺)。子授け不動と言われていました、御開帳は一月二十八日です。

説明版に山号「江戸田山」(場所不明)とある。

ある時、ここの本尊を盗んだ悪人は始末に困り畑に捨てたと言う、ところが夜になるとその畑は金色に輝き出し、村人は不思議におもい畑を調べたところ、ご本尊を見つけて無事本堂に返されたと言われています。

取手市台宿チューリップ幼稚園のある交差点には、江戸田山不動院と新四国相馬霊場第四番札所の二つのお堂が並んでいます。お堂の前の道は、二手に分かれ左側の道幅の狭い道は、取手一高の正門前を通り、JR常磐線上の四谷橋へと続く「佐倉道」といわれた古道で、さくら道は筑波山へと通じていた、右方面の道は井野の団地へと続いています。

「井戸田山不動院子授け不動尊」の墓地と御堂は五百メートル先にあり、こちらは「井戸田山」である。

墓石が20基程あり、長方形に近い敷地の中央に「不動院」と扁額に書かれたお堂が鎮座しています、山門には銅版に「井戸田山、子授け不動尊 縁日一月二十八日」と記され、門を入ると左側に、堂再建記念石碑が建っており「本尊、井戸田不動明王、下総国相馬郡台宿村不動院 文化四年(1807)卯正月」と刻まれています。井戸田を江戸田と言ったのか?。

御堂は平成4年12月に改築されました。

井戸田は、字名として青柳の金門酒造、とりで医院辺りで使われていました。

さて同じ村内で、不動院が二つもある訳がありません、明治時代の地図と取手市史を調べると、第十番相馬霊場札所塔は安永五年(1776)に百番為二世安楽奉納により光音禅師によって建立、台宿の東福寺(高野山金剛峰寺末)は、同場所に明治31年に創立したが、本尊の十一面観世音菩薩を残し、既に廃寺となり現在は台宿集会所となっています。

東福寺は不動院を統括したのでしょう、同じ真言宗寺院ですから。だが、やがて寺院を縮小し、不動院は墓地と大師霊場四番札所を残して檀家だけとなり、拠所を光明寺から昌松寺管轄としています。

不動院が香取神社村社の境内に移されたのは明治末か大正で、昭和初期の巡拝図では現行と同じルー

トになっている。また、井野に東福院と台宿に東福寺がありました(共に廃寺)、似たような寺名ですが東福院は法泉寺(土浦)門徒で時代に差があるため関係はありません。尚、第四番札所のご朱印(印のみ)は交差点向かいの「かめや酒店」で頂けましたが、現在は扱いをしていないようです。

第三番、市民会館前の八坂神社境内、西照寺(廃寺)。御祭神、素盞嗚命、牛頭天皇とも呼ばれる。
ご本尊、不動明王。移し寺、徳島県亀光山金泉寺
御詠歌、極楽のたからの池を思へただ
黄金の泉すみたたへたる

江戸時代、この地に西照寺という八坂神社の別当寺があり、そのお寺でお守りしていた大師堂のなかには柔和な面差しの大きな弘法大師像と、西照寺の名残本尊であった不動明王が矜羯羅童子(こんがらどうじ)と制多迦童子(せいたかどうじ)の脇侍を従えていました。脇侍は現存しない。

取手宿の鎮守、八坂神社は素盞嗚命(すさのおのみこと)を奉斉し、地元の人達から「天王様」と親しまれています。寛永三年(1626)創建、拝殿天保三年。

本殿は明治三十六年に修復され、周囲の壁に細密な彫刻が施されています、特に左右の向拝柱に登り龍、下り龍の勇壮豪華な彫刻があり、笠間の名工であった後藤縫殿之助の嫡男後藤桂林、弟の後藤保之助と波の欄間(らんま)彫刻で有名な波の伊八の四代目高石伊八郎、むじな渕(間宮林蔵生家近隣)の寺田松五郎の手によるもので、彫刻の寺で有名な柴又帝釈天の彫刻を手掛けた同じメンバーでした。

この五人の名が刻まれた基壇の組石が本殿後ろに残っています。

社地には寛保三年(1743)銘の華麗な松竹梅を刻んだ石灯籠や、文化九年(1812)作の関東屈指の大神輿などがあり 往時の宿場の繁栄が偲ばれます。今も、夏の祭礼は近隣にきこえ、盛大なものです。

西照寺跡は、取手市内で最初の小学校であり里仁小学校と言われました、取手市民会館がある所です。

里仁小学校は、現在の取手小学校として台宿に移っています。

大鹿山長禅寺、院号無、宗派は臨済宗妙心寺派

京都妙心寺末寺(まつじ)です。

新四国相馬霊場八十八ヶ所の第一番、第五番、第八十八番札所が祀られています。

長禅寺という寺名は、全国に多くあります。

朱雀天皇代の承平元年(931)、「平新皇将門相馬小次郎」が祈願所として、現白山前の金刀比羅神社の地に創建とされています。金刀比羅神社の敷地は現在に於いても、長禅寺の所有地です。

なお、金刀比羅神社は観覚光音禅師による開創なので、長禅寺が既に現在地に移った後に神社が創建されたという歴史順序になります。

将門没後は、御厨(みくりや)三郎吉秀という人物が密かに守本尊を守り伝えてきたものの、荒廃がひどかったと伝わっています。

後の、吉秀29代後胤(こういん=子孫)織部時平(おりべときひら)なる武将は、文暦元年(1234)将門以来の守本尊である十一面観世音菩薩立像を四間四面御堂に安置し、承久元年(1219)には議門和尚を開祖として再興を計りました。仏像十一面観世音菩薩立像は快慶こと安阿弥(あんあみ)の作と伝わっています。

江戸時代の慶安二年(1649)八月二四日付の徳川三代将軍家光の朱印状を所蔵し、朱印地五石三斗を賜っています。

長禅寺が白山にあった頃には、千体観音像が祀られていたのですが、水戸街道沿いの現在地に移った頃には、三千体ほどになったようです。

しかし、堂の老巧化により観覚光音が大改装し、百体観音堂として栄螺堂建築で改築されました。

昭和時代の頃には「取手百八十八霊場」と近隣の人達は、長禅寺を呼んでいたようです。

栄螺堂の三世堂の西国33観音、坂東33観音、秩父34観音の百観音と大師霊場の八十八札所を合わせて百八十八という事です。

三世堂の扁額を見て頂くと「百一番」と記されています。この百一の一という数値は?です。

この扁額に書かれているのは御詠歌です。

「施無畏(せむい)」の扁額の下、ワニ口の後ろにあり観覚光音とあります。

「補陀落はいずこなるかと思いしに　今、大鹿に法の花山」

観音の極楽浄土は何処にあるのだろう、と思っていたが大鹿山長禅寺に、法華の浄土はありました。と「ひらがな古書躰」で記されています。

第一番、霊山堂（れいざんどう）、取手市大鹿山長禅寺の境内

ご本尊、釈迦如来。

移し寺、徳島県竺和山霊山寺　（霊山の読みに注意）（じくわさん　りょうぜんじ）

御詠歌、霊山の釈迦の御前にめぐりきて
よろずの罪も消えうせにけり

相馬霊場巡りの一番札所である霊山堂。

安永三年(1774)六月の相馬霊場への移しです。

2年後の安永五年(1777)に新四国相馬霊場八十八ヶ所は概完成したとあるが、石柱説による説です。

相馬霊場開基説は2013年現在、寛永年間、安永4年、5年、8年と四説あります。

安永四年「霊場石土写記」光音著の内容から、第89番の記載などあり、既に完成している様子が伺えます。之により、霊場石柱建立は霊場開基後の建立年号であり、創建時の年号ではないと考えられる。

宝暦13年(1763)改築の三世堂です、白嗣殿(はくしでん)建築の為の御布施に一役買っている相馬霊場でもあります。

12年後の安永四年(1775)夏に新四国相馬霊場八十八ヶ所は完成していました。

第五番、長禅寺境内地蔵堂。

ご本尊、地蔵菩薩。

移し寺、徳島県無尽山(むじんざん)地蔵寺

御詠歌、六道の能化の地蔵大菩薩
みちびき給えこの世のちの世

六道は、地獄界、餓鬼界、畜生界、阿修羅界、人間界、天上界の六つを云う、また能化の地蔵とは終生済度をしてくださる地蔵菩薩のことです。

五番の堂は、光音禅師が構想していた寺へ開基できなかった大師堂ではないかと推測しています。

小文間(おもんま)の東端を流れる小貝川に戸田井橋が掛かり、この橋を渡ると北相馬郡利根町になる昔、布川といわれた頃の利根町は河岸場として取手より栄えていました。

水戸街道の渡し場としても江戸時代に取手の渡しを幕府指定の渡し場とするまでは、利用者は圧倒的に多かった。

理由は我孫子宿から牛久への間、取手の渡しは、利根川と小貝川の2の河川を渡るが、布川の渡しでは利根川1本で済む。また、相馬霊場を巡るお遍路さんは小文間の戸田井から布川に行く必要が無いので我孫子の布佐への、お遍路の渡しが便利であった為でした。

実は、この「お遍路の渡し」には、もう一つおまけがついており、布川の徳満寺に相馬霊場第5番を開基出来なかった、という言い伝えがありました。

後に戸田井に橋が掛かっても、布川には行かなかったようです。但し相馬霊場完成の30年後に、徳満寺に一番を置いた「布川霊場八十八ヶ所」が開かれています。どう解釈するかは何とも言えません。

四国霊場第五番の地蔵寺には、奥の院羅漢堂があり、等身大の五百羅漢像が安置されています。

志度金三百円が必要ですが拝観すべき価値は十分にあります。

第八十八番、長禅寺境内薬師堂、結願（けちがん）札所。

ご本尊、薬師如来　移し寺、香川県医王山大窪寺

御詠歌、南無薬師諸病なかれと願いつつ
詣れる人は大窪の寺、

結願所の八十八番も同境内に置かれています。

新四国相馬霊場の場合は、巡拝始めの発願は一番がいいと思いますが、何番札所から始めて頂いても構いません。相馬霊場お遍路で初めて訪れた札所を発願(ほっがん)と言います。

但し、巡拝最後の札所は八十八番で終りにして下さい。八十八ヶ所全てを巡って満願(まんがん)といいます、満願すると「結願(けちがん)」のご朱印を頂けます。しかし、相馬霊場の場合は残念なことに、各札所のご朱印が出来ない為、結願も押せません。

尚、我孫子市布佐台の浅間新田に、第八十九番が番外として建立されていますが、巡拝途中でも、または結願後に巡拝されても、どちらでも構いません。

【ワンポイント】相馬霊場には「**大師道**」と記された古い石柱が立っているので探しながら歩いても楽しいです。四国の「遍路道」と同じです。

四国霊場の場合は、巡拝中に別格として二十ヶ寺の札所があるので、折角ですから別格札所も参拝するとよいでしょう。特に別格四国霊場第4番の鯖(さば)大師本坊は、お遍路さんに人気が高く必ず巡拝される札所となっています。

なお、四国霊場完拝後には、高野山へお礼の報告をしなければなりません、八十八ヶ所を巡った御利益が半減してしまうので、高野山奥の院御影堂に立

寄りましょう。

結願札所は全札所の最後に巡らないと、**御朱印帳に「結願」印**が押されませんので気をつけて下さい、

観音霊場巡りの場合でも同じです。西国、坂東、秩父の各三十三観音霊場巡りに於いても、お礼参りを長野の善光寺と上田別所温泉の北向観音常楽寺の２ヶ所に出向きます、御利益が半減するそうです。

引越した長禅寺と十一面観音

承平元年(931)平將門の勅願所として、白山(現在の金刀比羅神社)に長禅寺は創建され、後に十一面観音を守り本尊にしたそうです。

元禄八年(1695)取手の渡しを、勘定奉行の支配下にあったが実際は水戸藩の命令で水戸街道と定めた為、長禅寺は街道筋である当地へ移りました。

取手市の大鹿山の白山からの移転により、大鹿山を「だいろくさん」と、呼ぶお寺があります。

三世堂、

十一面観音堂が老朽化したため、栄螺(さざえ)堂建築形式に改築した御堂です。

文暦元年(1234)平將門の弟、将頼の子孫と言われる、大鹿左衛門尉綾部時平が十一面観音を建立したと伝えられています、十一面観世音菩薩立像は安阿弥(あんあみ)である快慶(法号)の作と云われる。

宝暦十三年(1763)、長禅寺住職幻堂和尚は、弟子であった光音禅師に、朽ちかけた観音堂の改築をまかせました。堂棟の扁額に光音禅師の名がみえる。

一階にご本尊の十一面観音と坂東三十三観音、二階に秩父三十四観音、三階に西国三十三観音の百一体の観音像が奉られています。観覚光音禅師の発願で螺旋階段を登る壁面を活用して百一体の観音像を安置し賽銭箱を設置しております、ここに賽銭箱のカラクリが潜んでいました、賽銭箱の底は一階のある場所に集まるように工夫されており、賽銭箱には賽銭が残らないのです。現在は痕跡は残っていますが使われていません。

又、さざえ堂の特徴として、外観は二階建てにみえますが内陣は三階建てで、階段は上りと下りが別々とされ、一方通行方式になっており、三階建ての珍しさもあり、三世堂は当時人気となり諸国近隣より人々が集まるようになりました。

（参考文献取手市史、長禅寺縁起）

以前は、三階の中心部分から下を覗くと一階フロアが望めるアトリウム(中庭)のような吹き抜けになっていましたが、現在は板を張り塞がれています。

安永九年(1780)に建立されたさざえ堂のルーツといわれる、江戸本所五百羅漢寺三匝堂(さんそうどう、倒壊により現存しない)に次いで古く、現存する栄螺堂では日本最古と言えます。昭和46年改築により、賽銭回収方式とアトリウムは建物全体の歪みにより修復のためなくなりました。

さざえ堂としての発願は観覚光音禅師ですが、建立は幻堂和尚でありその御心を尊ばなければなりません。日本いや全世界的視野を含めて、最古の栄螺形式建造物が仏殿として残されていることは、貴重なことで無くしてならない財産と思います。

御開帳は、四月十八日に堂内を公開します。

内部の階段は急なので特に下り階段は後ろ向きで降りると良いでしょう。

長禅寺の三世堂は出会いの場 ?、三件

長禅寺と境内の三世堂の逸話には、ロマンチックな噺が多く残っています。

一、平將門と桔梗御前の出会い、正室のある將門が、佐原の豪族の桔梗に出会った場所といわれる伝説。

長禅寺は、承平元年(931)に平親皇將門相馬小次郎(平將門)の勅願所として創建されたと云われる、その創建式典で桔梗に出会ったという伝説がありました、妾である桔梗御前の伝説は取手市内に数多く残されています。

二、新聞小説や家庭小説で著名な小説家、菊池幽芳(ゆうほう)と取手染物屋の杉浦玉枝との、しばしの別れの舞台になりました。明治24年に二人は結婚し生涯を共に過ごしました。

幽芳の新聞連載小説「白蓮紅蓮(しろはすべにはす)」に昭和初期の栄螺堂の様子が描かれています。

廃本のため入手不可、相馬霊場のホームページに掲載してあります。

〔郷土史書庫〕クリック、新四国相馬霊場88ヶ所を巡る会で作成した郷土資料他の書庫、画面が表示されるので、◆菊池幽芳著作「白蓮紅蓮」明治時代の栄螺堂　2016年1月5日　にあります。長編。

三、高村光太郎の妻智恵子の看病をした姪の看護婦である　はる子は宮崎仁十郎の息子である宮崎稔と結婚しています。「利根川の美しさは　空間の美である」と光太郎は名言を残し、牛久に在住していた小

川芋銭の「景慕之碑」に筆を残していかれました。
取手に一時在住の「智恵子抄」の、高村光太郎。**清涼亭**は休憩所で、河童の絵で有名な牛久の小川芋銭による命名です。

光音堂(こうおんどう)と観覚光音禅師(かんかくこうおんぜんじ)、

相馬霊場を開基した光音禅師は天明三年(1783)十月十七 日没、ここに火葬され永眠しています、
他の地へも分骨され、取手市白山の光音堂、生誕の地である長野県海尻町の墓地に分配納骨されています。また、我孫子の東源寺には位牌があると云います。

小林一茶の句碑

「 下総の 四国巡りや 閑古鳥 」があり、一茶の書「七番(しちばん)日記」には、この頃一茶は相馬に度々訪れていた記述が残っています。
旅の目的は、流山の双樹、布川の月船、守谷西林寺の鶴老(かくろう)、富勢の雪月庵嘯花(しょうか)、等や取手の国学者沢近嶺(ちかね)との俳諧仲間の交流により49回も訪れたと云われています。
「閑古鳥(かんこどり：カッコウ鳥)」は、俳句の季語で夏を表します。俳句に季語がなければ川柳になってしまうのは皆様もご存じのとおりですが、「閑古鳥」イコール「閑古鳥が鳴く」ではありません。
「鳴く」と読まれていないので寂れる情景を詠った句ではなく、静かな境内で「カッコー」と鳴く声が響き渡る夏の情景を詠んでいる句です。
この句は長禅寺で詠まれた句ではない、と云う著書がありました。俳句は何処で詠まれたか場所を特定することが難しいのですが、一茶の研究は日記などにより近年たいへん進み、何時頃詠まれた句なのか分るようになりました。
一茶は、この句が詠まれた年の春に相馬郡高野山村の最勝院に来ています。七番日記に「・・・大桜あり」と記されているので春は間違いない。
しかし、この句は文化七年(1810)四月に詠まれた句で、既に説明通り「閑古鳥」と季節は夏です。
調べると、旧暦の文化七年四月四日の七番日記に「四、寅刻雨、巳刻より晴、大南吹、水戸侯牛久より若柴通小金泊」とあり、翌日は「五、大晴」「夏の夜やいく原越る水戸肴」と「下総の四国巡りや閑古鳥」がある、一茶は、布川の古田月船邸に宿し、翌六日は「田川(河内)に入」と記され、更に、渡し場で足を踏み外して利根川に落ちた老女お遍路さん事件があり、土左衛門が浮上しないため同行の仲間が足止となる話しが記されています。
この様に、牛久や河内、取手を歩いていた様子が伺え、取手を含む北相馬に居たことは間違ないようです。頻繁に守谷の西林寺と布川の間を往復していたので長禅寺には何度も立ち寄っているので、長禅寺で詠んだ句であると思われます。

打止

佐倉道という古道を歩きます。
佐倉道の起点は千葉県佐倉市で終点は筑波山北条になります。利根川図誌という布川の医者が著した利根川、大河川坂東太郎の情景を上野国から銚子まで絵と文で説明しています。此の利根川図誌に小堀から山王新田迄の少しの区間ですが、佐倉道として記載されています。
現在の茨城県道取手つくば線19号(取手市酒詰～つくば市西大橋)に重複する街道が江戸時代に既に存在していたということです。
その歴史は、徳川の時代となり関東武士団は滅び佐倉藩の統治下となった北条や小田、守谷は、佐倉城主により献上品は勿論年貢等の納付が義務となります。人達の往来も増えたはずで道が整備されて当然です、取手の人々は「佐倉街道」と目的地名を活かしたと思われます。しかし、佐倉街道という街道名は既に存在していたため「守谷道」と改めたと思われます。水戸佐倉街道は、江戸幕府により「佐倉道」「佐倉街道」と命名された街道であり、水戸街道新宿(にいじく)から佐倉城に至ります。
しかし、この街道を経由して成田山新勝寺へ至る成田参詣が隆盛するに従い、文化年間頃より「成田道」「成田街道」と呼ばれるようになったとか。
相馬の佐倉道は、千葉県側では水戸街道に合流せず、成田街道を中峠迄旅すると小堀河岸へ利根川(古利根)を渡り、小堀へ、押堀(おっぽり)の沼地を片町で水戸街道出ます、八坂社まで登り、取手本陣の後ろの細い道が佐倉道でした。さらに、台宿坂上の香取社へと斜面の道を進みます。
守谷道に合流、JR常磐線をまたぐ四ツ谷橋へ、跨線橋を渡り国道6号に至ります。
八坂社の交差点には、台宿坂上からの一方通行道がありますが、おそらく明治時代になり、佐倉道の道幅を広げるには地形上難しい為に新設したものと考えられます。明治27年(百年前)の地図には新設の

守谷道が記載されていてほぼ一直線であったことが分かります。

話が逸れますが此の百年前の地図には、現取手JP前に「大鹿橋」が架かっていて、江戸時代の守谷道とはルートが違っています。守谷道は、明治の初めころに新しくなり、それまでのルート、白山から中原、寺原駅経由で大鹿の谷津を迂回して池袋惣代八幡に至っていた守谷道を、国道294号と並行した稲ルートにあらため距離を短縮した事がわかります。

国道6号を渡ると、佐倉道は、白山の弘経寺の参道を左に見ながら直進して、金刀比羅社の大鳥居の十字路に着きます。

十字路西方が取手競輪場で大鹿山と言いました。

直進が昭和時代までの守谷道です。キャノン取手事業所があり、その先に取手JPがあり交差点の中に大鹿橋がありました。国道294と別れ、JPの前の道を進みますが、戦後ここに守谷行の路線バスが走っていました。取手西小入口の交差点の手前には古い石仏が現在も路地脇に立ちすくんでいます。

惣代八幡宮の手前に右からの道と交わりる所が、池袋です。此処が江戸時代からの守谷道又は佐倉道であり、谷津の底部を避けて歩きやすい道として利用されたのですが、随分と回り道であった事が伺えます。時代が新しくなると共に谷津の川幅も狭くなり渡れるようになると、労力は必要になっても、目的地に近い道を選ぶようになったと思われます。

ある郷土史には、谷津谷を2つも超える守谷道を紹介していますが、根拠が路肩の小さな石標なので疑いを抱きます。この様な現状を他でも見られるのでご紹介しました。

取手市内4番目の水戸街道跡。

大鳥居がある、金刀比羅宮の十字路の東方には国道294号との交差点が見えます。此の道を進み相馬霊場第83番、常総線の中原踏切と踏切脇の空き地の相馬霊場第53番を袖に見ながら進むと、寺原小学校が見えてきます、その手前に左にカーブした脇道に差し掛かります。守谷道、佐倉道、山王道、水戸街道大廻道と4つの名称が重なる街道でした。

寺原駅踏切の交差点を東方に右折すると、相馬霊場第69番があります。更に進みコンビニの先で左側の道へ入り、新取手住宅団地の東外れの田道(車道)を北に、相野谷川の小さい川沿いを進むと、未舗装路の先に橋が架かっています。橋を渡ると岡の山林に突き当たります。突き当たっても山林を横切る道は40年ほど前に無くなっているので右方に少し進み岡神社の鳥居の前の堀を上流へ進み、迂回して岡堰に出るルートが4番目の水戸街道と云ったのではないかと思われます。

水難の多かった取手は、大雨が降ると水戸街道は水没するために、迂回路として使われた道でした。

従って、正式な街道筋ではありません。

岡堰の小貝川は現在、土手になってしまいましたが、大きな堤が創られて、山王へ繋がっていた様です。山王からは渡しがあり伊奈、筑波へと佐倉街道が存在していました。現在の茨城県道19号の前身です。また、筑波北条小田から笠間には瀬戸井街道が柿岡経由でありました、現フルーツライン。

守谷の笠間街道の筑波北条笠間間と同じルート。笠間から先は、平成5年指定からの茨城県道61号日立笠間線になりますが、常陸太田と笠間間は古道のようでした。

旧取手宿本陣、染野家住宅　(立寄りません)

茨城県指定文化財・取手市指定史跡

表門：一間薬医門、桟瓦葺、

本陣は街道における身分の高い武家の宿泊施設。

江戸時代初期、取手宿は水戸街道が整備されると利根川の渡船場に隣接する重要な宿場となって発展し現在の取手市の基礎となりました。

染野家は代々取手宿の名主であり、貞享4年(1687)に水戸徳川家より本陣を命ぜられた。

現存する主屋は寛政6年(1794)に焼失し、翌年直ちに復興したものです。大型民家のつくりですが、式台玄関の上部には重厚な入母屋破風を設け、風格を保っています。

門を入り正面の母屋の左側から裏山に上がると、歌碑があります、第九代水戸藩主徳川斉昭の詠んだ歌で江戸屋敷から届けられました。

水戸徳川家と本陣染野家の結びつきを示すものといえます。

「　指(さし)て行(いく)　さほのとりての　渡し舟

おもう方へは　とくつきにけり　」

作られた「取手八景」

栗山台という大鹿の一部落

飯田きくさんの追憶談

溝口の別荘

取手駅の西側の高台に利根川を見下して青黒い三階建の家がありました。今は結城さんの所有で、誰が住んでいるか知らないが、もと取手の町長をやった吉田村の平本正志さんという人が建てた別荘です。

現在、取手西口前の、スーパー西友の駐車場後の高台になります。

「取手」の地名元、大鹿城の「砦」から、砦―とりでー取手、取出、鳥手等―取手と変化したもの。

栗山台とは国道6号取手競輪場辺りの高台で、明治後期頃迄「大鹿村」と呼ばれていました。

従って行政的地名ではなく、当時の一般的呼び名。

平本という人は偉い人で財産があったのですが、その後没落して家の人も死に絶え、いま吉田には主家だけが残り、親戚の者が居住していた様です。

平本正志はこの別荘を溝口子爵に売った、ということですが、溝口子爵ぱ日露戦争のとき捕虜になり、本来ならば軍法会議で死刑になるところ、奥さんが宮様から来られた人なのでその縁故で処罰されませんでした。

しかし、当時の人々は、非国民だと言ってこの別荘に石を投げた、と言う話が残っています。

戦時中、今の奥さんの里の土浦の土屋家へ行ったとか、旧領越後の新発田に疎開したとか聞いていますが、建物は結城さんの手に渡ったようです。

取手八景

近江国の「近江八景」は、室町時代の乱をさけて近江に住んだ関白近衛政家が、支那の蕭湘八景(しょうしょう はっけい)、中国の山水画の伝統的な画題。または、その八つの名所のことで蕭湘は湖南省一帯の地域。にならって選んだと伝えられています。

取手八景はこの近江八景を真似て作ったもの。

では、誰がいつ頃作ったものか解き明かします。

一説に歌人沢近嶺の作か、と言う学者もいましたが、近嶺は天保九年八月五十歳を最後に黄泉(こうせん=あの世)の客となっているので、後に記す「君初橋」の由来の意とは不合しません。

平成13年夏、取手市埋蔵文化財センター第4回「とりでゆかりの人びとの書」展に於いて、市内の旧宅平本家が収蔵する、秦山(しんざん)自筆という取手八景が出品されました。

秦山、土方久元は幕末の志士で天保4年(1833)、土佐藩の郷士の生まれで大正7年に亡くなる。

明治政府の農商務大臣、宮内大臣、国学院大学長等を務めた人物で取手市内吉田の名主でした。

重野安繹、文化十年(1827)薩摩藩郷士に生誕、晩年に歴史学会の長老として重責を果たし明治43年他界しています。

二人ともに平本氏が栗山台に所有していた別荘に度々招かれ滞在していた人物でした。

吉原格斎著「相馬霊場案内」大正四年初版によれば、沢近嶺が選んだものを、近代に入ってから秦山や野村素介こと素軒らの漢詩人が来遊し倣う。

「吉田の平本家」と本名を避けて公文書は記していて、ここに疑問が生じるのは最後までお付合い下さい。

一、君初橋の晴嵐、近江八景の「粟津の晴嵐」

尊き御通りありしとて、この名あり用水堀に架したる木橋にて、春の晴嵐に両岸の景色にあかぬ好望の地なり

取手町の西北端の高き地にて、差昇る月もなく利根の流れに照り渡る、眺めも清き秋の夜の恨み、何処にありなむと思われ、こよなき景色限りなく見ゆ

君初橋とは、愛宕神社前より利根川渡船場へ行く途中の小さな水路に架けてあった無名の土橋で、明治17年、牛久市女化原における陸軍大演習御統監のため、明治大帝御行幸の際御馬車通過の御道筋にあたる所から、新たに木橋に架けかえたので、のちにこの橋を誰いうとなく君初橋と称されたもので、国道6号大利根橋袂の愛宕神社は、現在の位置と異なり元は利根川に面して鎮座してをり、渡船場は大利根橋の架橋により廃止となり、君初橋と祢した橋と小橋も共に取払われて今はその跡形全くない。

明治時代は渡船場に至る小橋までの堤防脇辺りの民家の庭先に、僅かばかりの桜や柳の木などが植えてあったところから、春の晴嵐にあかぬ好望の地とされ、近江八景を模したものと解される。

二、栗山台の秋の月、近江八景の「石山寺の秋の月」

幾百とせの末よせし高台に、尊き大師の安置せらるる寺院にて、仏地かしこきとど眺めのよき寺庭なり

栗山台とは、取手駅西側高台の小字名で、比処に明治31年創立台宿の高野山金剛峯寺末東福寺(廃

寺)の堂宇があり、此処の境内より利根川眺望を詠んだもので、「石山寺の秋の月」を模したものであろうが、今はこの堂宇はなく、当時を知る人も少なくなった。

新四国相馬霊場第31番が勝手に強制移転された処です。

栗山はその昔大鹿村に属し、明治18年新町全域より白山前一帯に及ぶ大鹿村が取手に合併以降は大字取手字栗山となり、東福寺跡は昭和47年6月1日施行の住居表示により、新町一丁目八番地に当る。

近江国の石山寺は、紫式部が湖上に浮ぶ名月を讃えながら、この寺で源氏物語を書いたと伝えられ、月の名所と観音霊場として知られ、参道には萩やつつじの大株が繁茂(はんも)し、花の頃は観光客で賑いを見せるが、今は周囲に人家も増し、此処から琵琶湖を眺める景観は昔日の静けさはない。

また取手の東福寺では大師詣の人がこの高台で大利根の景勝を賞でながら休息しているお遍路姿を以前はよく見たものだが、石山寺と同じに取手の眺望も時代と共に一変している。

此処の地続きに元子爵溝口邸の木造三階建の住居が明治年代よりあって、地元の人はこの家を俗に三階と祢していたが、去る昭和49年取壊された。

道路をはさんだ向側高台は石引と称する小字名で、元は香取政蔵氏の別荘、明治43年3月14日、日本赤十字社総裁でもあった閑院宮載仁親王(かんいんのみやことひとしんのう)殿下が御宿泊された当時は、皇族の御宿舎のため坂の要所や庭内には、陸車の歩哨や、御警衛の警察官が立番していたので容易に近寄ることも出来なかった。

庭にある松は宮様お手植のもので、脇に仙石松と刻した記念碑が建立されていて、元気に枝を張っていました。

乃木大将が取手へ来町されたのは、その前年の42年6月13日で、長禅寺石段下にある「明治戦捷記念」の碑は将軍の揮毫によるもので、当時は鏑木海軍少将、松浦伯爵も同道の上、除幕式を挙行されました。

三、上沼の落雁、近江八景の「堅田(かただ)の落雁」

上沼とは利根川ゴルフ場の最西端で、もと二つ大黒のあった辺りの沼池を称し、秋になるとこの沼に雁が飛来するところから狩猟者の垂涎(すいえん=よだれ)の地でもあったが、レジャーと開発によってこの辺りも変り、最近は雁が列を組んで飛来する夕景も絵で見る以外眺めることは出来なくなった。

近江八景の「堅田の落雁」をとったもので堅田は琵琶湖上にある浮御堂で有名な所、お堂の周囲は上沼と同じに葦が生い茂り、雁の安息地でもある。

四、長禅寺の晩鐘、近江八景の「三井寺の晩鐘」

三井寺は大津の町の山手にあたる寺で、夕暮れの湖上に余韻を残して鳴り渡る鐘の音は、遊子の魂に深い印象をきざみつけるのと同じように、長禅寺の梵鐘も夕暮れに撞く音は樹々の間より響く余韻が、利根の河畔で聴いていて琵琶湖の景観を彷仏させるところから撰んだものであろう。

昔は表で遊んでいた子供達も、夕方長禅寺で撞くこの梵鐘の音を合図に、家に蝟るようしつけられて来たものだが、今は十二月の除夜の鐘以外撞かなくなった。

五、念仏院の暮雷、近江八景の「比良の暮雪」

取手町民の埋葬地にて利根川の流れに面したる高台なり、対岸の樹々に渡り積む雪の眺め、青き流れの清く目に入りて、寒さ忘れする景色こそ価なれ

念仏院は人川山柚浄院弘経与の汞与であったが、大東亜戦争後は独立して一寺となった浄土宗の寺院であるが、昔は共同墓地であったため門閥宗派を問はない各宗の墓地でもある。

近江八景の「比良の暮雪」統みかえた訳で、比良は浜大津から遊覧船で湖上を進むと堅田の浮御唯や琵琶湖大橋を過ぎて左前方に比叡山と並んで遠望できる山で、謡曲竹生島のなかに「比良の嶺颪(ねおろし)吹くとても」云々と詠われていて、残雪の夕景はまさに絶景とされている。

雪の夕暮れ念仏院の台地より利根の清流を眺める景観もまた一入の感にうたれる。

六、観音堂の夜雨、近江八景「唐崎の夜雨」

静寂洗心の仏地にて、雨の夜の殊に、浮世心忘るる心地する清地なり

観音堂は台宿にある堂宇で洗心静思の仏地として、古くから土地の人によって信仰が高められている相馬霊場第十番札所です。

近江八景「唐崎の夜雨」を模したもので、唐崎は老松の大樹で知られた所だが今は枯れてしまった。

七、利根の帰帆（きはん）、近江八景の「矢橋の帰帆」

利根川に架したる汽車の通路ありし処、橋間を潜る幾十の帆船を鶴の歩行に眺められ、げに捨て難き風景なり

高瀬船に俵を積み、帆に風をはらませて利根に棹さす景観は．近江八景の「矢橋の帰帆」を思わせる捨て難き眺を題して選んだものと思われる。

この一幅の絵巻物のようなのどかな風景も今は当時の写真によって知るほか無く、矢橋の港も今は陸地にに変わり、石垣や常夜灯が僅かに残って、かつての面影を留めているに過ぎない。

八、根柄の白雨、近江八景「瀬田の夕照」

利根川吉田堤に面する処なり、幾珀町歩の田圃を一視線の中に広望すれば、水色またとなき興味の地なり

根柄は大字台宿の小字名で。根柄前と根柄台の二つに別れている。新道の消防火の見櫓の裏側崖下を通常根柄と呼称し、その前側は高畑と称する小字で、一面田園と畑でしたが今はこの辺りも大きな工場や人家が建ちならび、地名も住居表示で東六丁目と変って昔の状景は一変しています。

此処の田圃にはよく白鷺が舞い降りて餌を啄んでいるところから、近江八景の「瀬田の夕照」の景色をねぐらに戻る白鷺の飛び交う姿によって、夕景を現わした白羽を白雨に読みかえたものと思われます。

琵琶湖を中心にした昔の近江八景も、周囲に近代建築が建ちならび、八景も名だけ残ったところから、昭和二十五年に次の如く新しい琵琶湖八景が作られました。

栗山台の三階

「取手八景」「東福寺のお堂」そして「別荘三階」が、大鹿村と云われた栗山台に、廃家になる程の大金を使い、当時の著名人を集めて取手八景なる漢詩を残し、更に相馬霊場第三十一番を此処へ移した、平本正志という人物を探ります。

新四国相馬霊場第31番は、文化4年観覚光音禅師により「井野天満宮」の境内に建立された、四国高知の第31番高知市蓬莱山竹林寺の移しです。

明治期中頃から昭和初期に掛けて大人気の大師霊場で、特に国鉄常磐線開通により人気絶頂でした。

ところが「取手市史民族編Ⅱ」の聞込み記事に、「天神様の所にある31番は家の所にもあったんだよ、イトーヨーカ堂の入口前に二間四方の阿弥陀堂と同じ位の間取りの31番があったんだな。だけど年寄り等がかたしちゃっただよ。家の方が本山で、天神様の方は掛所だっていうんだよね。だけど天神様の境内の方が本山に見えるよね」。

此の話の他にも「栗山台の東福寺別所の境内のお堂では、お遍路さんの姿をよく見かけました」とあります。

相馬霊場第31番は、井野天満宮から明治末に平山という人物によって、観光目的で札所を栗山台の別荘三階敷地内に移動、背景に東福寺を置いた。

取手町の観光に創った栗山台と取手八景は全国に知られる程に美名化され知られる様になりました。

しかし太平洋戦争で日本が敗戦したと同様に、平山氏の目論見も急展開します。

相馬霊場第31番は、取手駅前の道端、に移設されましたが、戦後は元の井野天満宮に戻ってきたのです。

2024年2月25日

新四国相馬霊場88ヶ所を巡る会資料

浴槽を積んだ「湯船」という移動銭湯

湯船を辞書で引いてみると、「入浴用の湯をたたえておく桶、浴槽」という説明に加えて「江戸時代、内部に浴槽を設け、港湾の船や川筋に漕ぎ寄せ、料金をとって入浴させた小船」とある。広辞苑第６版。

取手には、昭和の初期まであった銭湯船です。

銭湯研究家の町田忍さんは、この湯船が銭湯につながっている面もあると指摘している。

お風呂の起源は室町時代とみられている。ただ当時は、蒸し風呂、つまりサウナのようなものだった。

では、蒸し風呂がいつごろから湯をためた風呂に取って代わったのかは、あまりはっきりしていないが、豊臣秀吉が兵庫県有馬温泉を好んで何度も訪れていたことや、徳川家康が1604年に熱海温泉に湯治に出かけたという逸話があることから、1500年代後半には湯につかることが広まっていたと考えられる。

江戸時代になると、庶民の間でも風呂に入る習慣が広まってきた。しかし、家に風呂があるのは一部の武士や裕福な商人に限られていた様です、多くの人はたらいに湯を張って、かけ湯をする程度だったと云われいます。

町人の台頭がいちじるしい元禄時代(1680～1709)になると、銭湯がみられるようになる。

ただし、当時は蒸し風呂の銭湯もあったようだ。湯を張るとなると、大量に水を使うため井戸が必要だったこともあり、銭湯の軒数は限られていた。

一方、江戸の町、特に下町はいたる所に運河や水路がめぐらされていた。

やや時代は下るが、歌川広重の「名所江戸百景」には、数多くの江戸の水辺の風景が描かれている。

江戸は水運の町で、地方から海産物や木材などを積んだ船が行き来していたので、そうした船着き場に、船頭や船旅の客らを入浴させる船が現れた。

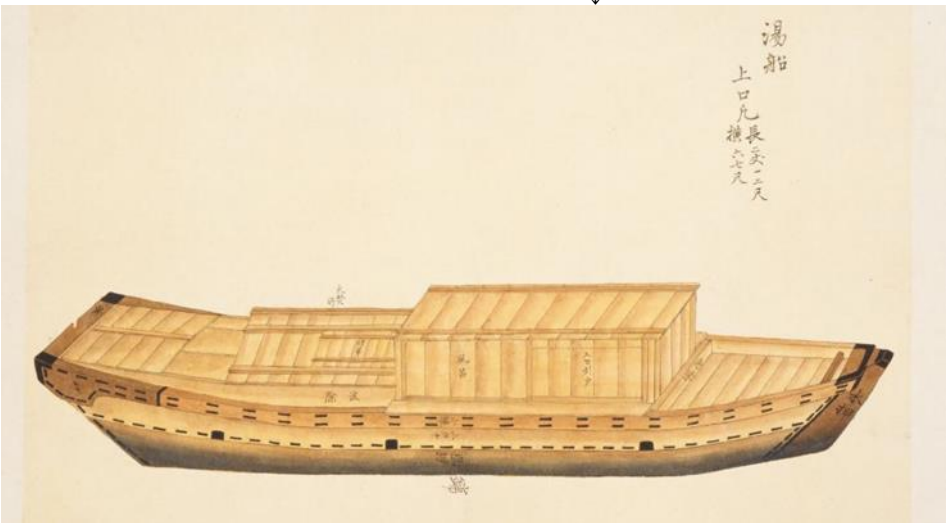
これが湯船と言われる船でした。

6.7ｍ長
2.2ｍ幅

入口引戸→

風呂桶→

薪焚竈→



湯船を紹介した船鑑(ふなかがみ)。

国立国会図書館　著書名「船鑒」明治六[1873]写

船の中央部に浴槽がある。入浴料は安く町人の間でも人気が高かったようです。

初めは、浴槽はなく、湯を入れた桶を積んだだけで「行水船」と呼ばれた。それがやがて浴槽を設けた屋形船になり、港や河岸に横付けして商売をするようになる。

江戸時代の川船の識別図鑑ともいえる「船鑑(ふなかがみ)」(船の科学館より)によると、船の全長は二丈十二尺とあるから10メートル足らず。

船の中央に風呂桶がある。客は浴槽からあがると船上でのんびり涼んだのでは・・・。

湯をはった風呂桶がある船のことを湯船という、よって湯船とは、この船に由来します。

湯船はまた、川や水路を利用して町々をめぐり、移動式の銭湯としても親しまれた。

到着の合図はほら貝の音で、これが鳴り響くと、近くに住む町人らがいそいそとやってきました。

町人に人気だった理由の一つが低料金。

通常の銭湯の料金八～十文の半額で入浴できたという。川の水を存分に使えたせいであろう。

湯を沸かす火種も、流木を乾かせば無料で、船も高瀬船の大きさであれば、中古で十分役に立つ。

湯船は文化文政期(1804～29)ごろまで続いたが、江戸の町が整備され、湯をはった銭湯「湯屋」の軒数も増えてくると次第に消えていきました。

取手にも湯船は勿論ありました。稲村や戸頭、大鹿の船寄せ場は既知で、夜間を含めて船頭の休憩場所としての歴史があります。

小堀の湯船の情景は、世界的に知られた小説になりました。